

HSS 音場の再現性に自信

BPOとVPOを本據地で聴いて

平本 修

ほんものの音はどうか？

コンサート・ホールの響きをわが家で再現することが HSS 方式で可能になった。多くの方が眉に唾する中で、永年オーディオ業界に身を置かれている M 氏が試聴に見えた。

数曲聴かれたあと「音楽が向こうからやって来ますね。2チャンネル再生では、スピーカの音を頼りにこちらから音楽を聴きに行かなくてはならない」「いい得て妙」。実に巧みな表現である。これは音楽が自然に鳴っていることの証左である。仕事柄、世界中の著名ホールを訪ねられた技術者だけあって、音の違いをしっかりと判別しておられる。

マーラーの「復活」第1楽章でオーケストラがクライマックスに達した直後、「ブラボーと叫びたくなる！」とその感動を口にされた。

後刻 M 氏からメールが届いた。「音の实在感を高めて音楽にひたるためのシステム。奇をてらったものではなく、本物のシステム」との評価をいただいた。

コンサート・ホールの音がわが家で再現できるようになると、つぎのステップとしては現地で本物の音を聴いてみたくなる。筆者が日常リファレンスとして聴いているのは、ベルリン・フィル (BPO)、ウィーン・フィル (VPO)、チェコ・フィルである。これらのオーケストラは国内で聴いたことはあるが、やはり CD に

取められている拠点ホールで聴いてみたい、と思っているうちに、ついに BPO と VPO を聴く機会がやってきた。

●ベルリン・フィルハーモニー

SACD で、ヴァント指揮/ブルックナーの4番と5番の交響曲をよく聴く。その響きは、再生音楽であることを忘れさせるほど臨場感に富んでいる。凄まじいばかりのオーケストラのエネルギーを感じさせてくれる。怒涛の響きとってよい。そのエネルギーが広大な空間に飛び散って行く様がよく収録されている。あのホールの響きを実際に体感してみたい!!

話に聞いてはいたが、ベルリン・フィルハーモニー (BP) はまさにサーカス小屋のような外観を持ったホールで、中に入ると想像以上にアリーナに近い構造であった。ステージの後方に客席があるというより、ステージ全体を客席で取り囲んでいるといった方が正しい。1階席には平土間がない。最前列からいきなり階段構造である。つまり、すり鉢状の構造なのだ。しかも最前列は横一列ではなく、「く」の字に折れており、中央部が指揮台から少し離してある。通常のホールであれば、4~5列目に相当する位置であろうか。さらに各座席の横幅が広く、通常ホールの3割増し程度はであろうか。それだけ、ホールの容積がたっぷりある

ということである。

ステージ後方には反射板に相当するものがなく、丸裸状態だ。代わりに、ステージ上方高く10枚の反射板が吊り下げられている。はたして、この特長ある構造のホールでどんな響きがするのだろうか？

この日はアバドの指揮で「ロザムンデ」「子供の不思議な角笛」「海」と内容的バラエティに富んだ演目であった。席は右Aブロックで前から8列目、指揮台から約30度振れた位置である。このホールの中でも、最も音がよいとされているエリアの一角にある (写真参照)。

最初の音を聴いた印象は「なんと鮮明な音がすることか！」であった。細かい音が手にとるように聴き取れる。コーラス、独唱の声が鮮明極まりない。それでいて低音も雄大に響く。「海」でのトゥッティでは、まさにエネルギーが飛び散る。天井が高く空間容積の大きなホールが、その響きを余裕を持って受け入れている。ステージが丸裸の状態なのに響きは豊かだ。何といううまい設計だろう。すばらしいホールだ!

ステージ上方には多数の小型マイクが吊り下げられている。40~50個はあろうか。前述のブルックナーは10年前のライブ録音だが、このマイク群を使用したのか？ 卓越した技術を持つエンジニアがミキシングしたのだろう。

●ムジークフェラインザール

翌日ウィーンに移動した。VPOは楽友協会ホール(MS)で、年に10回程度の定期演奏会を行う。土、日2日間のマティネーが基本だが、ソワレ1晩のみやソワレが追加されて3日間のこともある。この定演は楽友協会員向けに催され、チケットは

一般販売されない。定期公演のほか
にホール主催のVPO演奏会がある
が、このチケットも大半が楽友協会
員向けに発売されるため、一般入手
は難しい。したがって、MSでVPO
を確実に聴くには、信頼すべき旅行
社を頼りにするしかない。

かくして日曜日11時からの定演
チケットを入手できたが、何と前か
ら10列目のど真ん中という特上の
席であった(写真右)。こんなよい席
で聴かせてもらっていいのか!!

MSは典型的なシュー・ボックス
構造である。天井は細かい凹凸はあ
るが真っ平だ、1階も平床で、わず
かに後方の数列のみ階段状になって
いる。それもそのはず、このホール
は舞踏会の会場としても使用されて
いる。ステージの横方向と奥行き方
向にはスペースがない。天井が低く、
ホールの端から発せられた音は、こ
の狭く細長い空間に閉じ込められて
醸成(?)されると考えられる。BP
とは対極にある構造だ。

この日の演目は、ゲルギエフ指揮
で「シベリウス：交響曲第1番」と
「火の鳥」であった。最初の音を聴い
たとき「あれ? 音像が少し遠いな」
であった。ステージからの距離は

BPで聴いたときよりは近い。しか
るに、音像が遠く感じられる。

残響が距離感に影響を与えること
はHSSの効果音のバランス調整で
体験していたので、音像が遠い理由
がすぐに飲み込めた。筆者の席で聴
く限りでは残響は予想していたより
は少なかったが、それでもBPの残
響に比べれば相当多く、しかも長い。
この残響のためにBPのような音
の鮮明さもない。

このホールで録音されたCDを
聴くと、残響がたっぷりのものから、
通常のホール並みのものまで各種あ
る。実態はどうなのか知りたかった
が、前の方の席では、直接音が多く
て残響過多という印象ではなかつ
た。冒頭の「復活」は、キャプラン
指揮のSACD盤の響きによく似て
いた。

MSは平行面で囲まれているの
で、音響エネルギーが減衰しにくく、
長い残響を生じさせている。このホ
ールの響きの秘密は、天井裏の空間
とか、床下の空間にあるといわれて
いる。強固とはいえない床や天井が、
低音のエネルギーを吸収し、定在波
を防止しているということか。彫像
の柱に音の拡散効果があるともいう

が、定在波の防止には役立たない。

BPで聴いてから中1日置いての
体験なので、BPとの比較にならざ
るを得ない。このMSは空間の狭さ
ゆえ、トゥッティでは音に窮屈さを
感じてしまう。BPのような開放感
のある響きではない。ステージが狭
いという事情もあるが、音響的にみ
ても、大編成オーケストラ用のホー
ルとはいえない。

考えてみれば、このホールが建設
された当時は、大編成の管弦楽曲は
まだ存在していなかったもので、当然
の話ではある。

吊り下げマイクの数もBPの半
分以下だ。'09年の「ニュー・イヤ
ー・コンサート」の映像を見ると、
スタンド・マイクも何個か併用され
ている。以前は吊下げマイクは見ら
れなかったから、年々音質改善が試
みられているのだろう。

ホールとオーケストラの関係

BPOとVPOの音の違いは、拠
点ホールの音響特性の違いによると
ころが大きいことがよくわかった。
BPOはあの巨大空間に音を行き渡
らせるために、パワーのある演奏を
せざるを得ない。CDから感じとれ
たパワーの秘密がここにあった。



●平本氏の席から見た2つのホールの情景。左：ベルリン・フィルハーモニー、右はムジークフェラインザール

VPOは国立歌劇場での演奏が母体になっている。バカデカイ音量を必要としないため、絶妙なハーモニーと繊細な表現に磨きがかかったに違いない。

ベルリンでは初日にドイツ・オペラで「トスカ」を楽しんだ。いまや人気抜群のヨナス・カウフマンが出演するとあって、チケットは完売。最前列の席でその歌声を堪能したが、真後ろのブラボーおぼさんの執拗な大声にはいささか閉口した。

ウィーンでは国立歌劇場で「エフゲニ・オネーギン」と「ドン・ジョヴァンニ」を観た。「ドン・ジョヴァンニ」はこの歌劇場の柿落し公演である。それゆえ今回の上演は創立140周年の記念公演と銘打っていた。終演後、ステージ上にオケ・メンバーも含め、関係者全員が並んでセレモニーが行われた。「オネーギン」を振った小澤征爾も最前列に姿を見せていた。

客席にはSPにガードされた一角があり、招待された要人が多数いたそうだ。外壁には巨大ディスプレイが設置されていたが、これでオペラの生中継サービスをしたという。これほど注目された意義のある記念碑的な公演であったことは、あとで知った。

音楽ツアーの総括

今回のツアーは、HSSの響きに慣れた耳に本拠地ホールの音がどう聴こえるか、を検証するのが最大目的であったが、ほとんど違和感がなかった。聴き慣れた音が精度を上げて眼前に登場した、といった印象で、HSSは生演奏の感触をよく現わしているとの自信を得た。

帰宅後、BPでの鮮明な音を目指して、フロントの効果音のレベルを

ほんの少し上げた。これにより音像がいつそう鮮明になり、BPの音の印象に近づいた。

スーパーリアリティの世界は、SACDの優れた性能と録音技術の向上によって実現できている。超高額なCDとか、初回ロット限定版と称する高額なSACDも出回っているが、良好な録音であれば、一般のSACDで十二分に生演奏の感触を味わうことができる。

3次元音場のこれから

HSSで3次元音場の効用は実証された。スピーカが4組もあるが、その存在をまったく感じさせない。これまでの再生音楽にはなかった音の世界だ。しかし将来性を考えると、すでに危機に面している。HSSの効果音を創生しているスーパーステレオ・プロセッサ SSP-5はメーカーのホームページに販売休止と出ている。特別に要望があれば販売するとのことだが、このままでは消えて行く運命にある。

HSSの音源は2チャンネル・ステレオである。2チャンネル・ソースが使えるということは、万能の音場再生システムとっていい。メイン・チャンネルはノーマルな2チャンネル再生システムをそのままだから、音量調整も通常の2チャンネル・システムの音量調整器で行える。

ただ、技術知識のまったくない音

楽愛好家の方が、サブスピーカ3組を駆動するシステムを構築するには戸惑いがあるかと思う。もし、3次元音場に関心のあるメーカーがその気になれば、サブチャンネル用の電子機器をワン・パッケージにまとめて商品化することは、それほど難しいことではあるまい。意思決定は3次元音場の評価次第だと思う。

しかし、現状のオーディオ界を見渡すと、指導的立場にあるかたでマルチチャンネル再生を推奨している人は少ない。5.1チャンネル・マルチを割愛した無圧縮の2チャンネルSACDが登場して来たのも、世相の現われだろう。2チャンネル主張派の人は、過去の4チャンネル失敗のトラウマがあるに違いない。この人たちがこれから自説を曲げることは考え難い。よって、将来を託すのは次代を担う若い技術者たちだ。

3次元音場再生が継承に値するシステムかどうかは、実際に聴いて判断するしかない。業務として試聴するのは難しかろうが、私的には試聴できるはずだ。画期的と称する再生音楽がどのレベルのものであるか、一度耳にしておかれることは、オーディオ界に身を置くエンジニアにとって決して無駄なことではなからう。50年にも及ぶ2チャンネル音楽の呪縛から脱却するためにも、若い技術者がHSS式3次元音場体験をされることを期待する。